

「東」と扶桑が結びつけられる理由

大形徹

はじめに

「東」という文字は後漢、許慎（五八？—一四七？）の『説文解字』の説によって、「日」つまり太陽が「木」の中にある、と理解されていた。甲骨文の発見により、「東」の字形が、「木」や「日」と関係するというのは誤りで、「ふくろ」の形であるとされるようになった。いまやそれが定説となっている。そのことは十分、承知している。その上で、それではなぜ、『説文解字』の作者、許慎は「東」という文字をどのように考えたのか、というのが拙稿の関心である¹⁾。

許慎がどのように考えた背景には神木の扶桑と太陽に関わるさまざまな説話がある。そのことについても従来、すでに指摘されている。扶桑と太陽という説は樹木の枝の間に太陽がみえるようなイメージを喚起させ、十分に視覚的であるように思われる。また実際、そうだとみなしうる画像資料も数多く見つかっている。

拙稿ではこのような画像資料もまた文字の形成に影響していたのではないかという推論を行った。

つまり、許慎は説話だけではなく、視覚的な画像資料をも見ており、

そのことに、もとづいて、「東」という文字の構造を考えたのではないだろうか。もとになる形があつて、それが文字化される。これは象形文字である。象形文字は『説文解字』の説く六書（指事・象形・形声・会意・転注・仮借）の一つである。「象形なる者は、畫きて其の物を成し、體に隨ひて詰誦す。日、月是れなり²⁾」で、「日」や「月」が、その例としてあげられている。日は「日」³⁾「𠄎」の二種、月は「月」⁴⁾という篆書形である。『説文解字』はこの篆書形をみて、「日」や「月」の形だと考えたのであろう。現在、「日」や「月」の甲骨文や金文の形がわかっている。そのため、たとえば「𠄎」の形の方が「月」よりも三日月の形に近い。しかし、許慎はそれをみて「月」と見たわけではないのである。

篆書という限定の上で、許慎は「𠄎」を「𠄎」⁵⁾「日」⁶⁾と「𠄎」⁷⁾と見たのであろう。そのときに、当時、流行していたであろう画像資料が、文字の構造の理解に影響をあたえていた可能性はないのだろうか。

一、甲骨文・金文の字形にもとづく「東」

「東」が「ふくろ」だという説は、徐中舒がはじめて唱えたと丁山が述べている。

許君言う。東は動なり。官溥説く。「日、木中に在るに从う」と。此れ殷周以來、東方に習用するの義に就きて以て字形に附會するなり。東の卜辭、東に作る。『殷契』卷二、第五葉 亦た東、殷契卷六第廿六葉、東、殷契卷六、第卅六葉の諸形に作る。東、以て日木中に在ると謂う可し。東は日⊗に从い、東は日⊕に从う。木中、皆な日に从うと為すと謂うを得ず。友人、徐中舒先生曰く、「東、古は橐字。『埤蒼』に曰く、「底無きを橐と曰い、底有るを囊と曰う」と。『史記索隱』に引く。『倉頡篇』に曰く、「囊の底無き者なり。物を囊中に實たし、其の兩端を括る。東の形は之れを象る。鼎文の重の字復に作るは人、囊を負うの形に象る。橐は以て物を貯う。物は後世、之れを東西と謂う。東西なる者は囊の轉音なり」と。山、其の説を按ずるに甚だ是。毛公鼎に東の字有り。散氏盤に東の字有り。諸家並びに釋して橐と為す。橐は許君、橐の省に从うと謂う。實は則ち従う所の東は即ち囊の字、『易』の爻の所謂、囊を括る者なり。囊中に物無し。其の兩端を束ぬ、故に亦た之れを「東」と謂う。實たすに物を以てするに暨びては、則ち形拓くこと大、東なる者は、囊の拓くこと大なる者なり。故に名づけて橐と曰う。橐と東と雙聲為り。

故に古文之れを借りて東方と為す。『春秋繁露』に「東方は木」と。『廣雅』釋天に、「東君は日なり」と。此れ又た附會するに五行を以てす。『說文闕義』⁵⁾ 以てす。

という。

『說文解字』所引官溥の説の東は「日が木中に在る」という字形の説明は、殷周以來、この文字を習慣的に「東方」の意味に使用されていることに關しての付会であるという。そして実際に甲骨文の字形を確認して、「日」と「木」が合わさっているのもあれば、「東」のように「日」とはいえない形のものもあると述べる。つまりは「日」と「木」の合字であるということに合理性はないのである。そのあと友人徐中舒先生曰くとして、徐中舒の説を紹介する。「東は古の橐の字」というのがそうである。「東」は「橐」である。これは「ふくろ」の底のないもの。囊は「ふくろ」の底のあるもの。「復」の文字はふくろを背負う形で、後世、中国語で物を東西というのは、そこからきている、といった説である。

あと丁山は「東」と字形の似る「東」について、両端を括った「橐」の中身のないものだと説明する。また、「橐」と「東」が双声であることから、借りて東方の意味となったという。さらに『春秋繁露』の「東方は木なり」や『廣雅』釋天の「東君は日なり」などを引き、それは付会であり、五行思想との関わりであるとす。

徐中舒自身は、

橐中、物を實たし繩を以て兩端を約括するの形に象る、橐の初文爲り。甲骨文、金文俱に借りて東方の東と爲す、後世更めて橐を作り以て囊橐の專字と爲す。《説文》：「東は動なり。木に从う。官溥説く、『日、木中に在るに从ふ』と。乃ち後起の字形に據りて説を爲し、確かならず。

という。「後からできた字形によって説を爲す」という。ここでは「橐」がなぜ「東」になるかといった発音の問題にはふれていない。丁山の引用する徐仲舒の説よりもむしろ簡単である。

白川静『字通』は、

「仮借」東はもと橐（ふくろ）の象形字で、橐（たく）の初文。のち仮借して方位の東の意に用い、本義の橐（ふくろ）の意に用いることはない。本義を失った字であるから、仮借とする。「説文」六上に「動くなり」と訓するのは、春に蠢動（しゅんどう）する意とするもので、音義説である。曹はもと二東に従う形で、裁判を求める当事者が、東矢鈞金（きんきん）を橐に入れて提供し、裁判が行われた。東が橐の形であることは、そのことから知られる。「説文」に字形を「日の木中に在るに從ふ」とし、樽桑（ふそう）神木の意とするのは誤りである。

↓橐・曹

という。

「東」のもと文字は「橐（ふくろ）」の象形字であり、「東」の意味として使用するのには仮借であるとする。そして「説文」に字形を「日の木中に在るに從ふ」とし、樽桑（ふそう）神木の意とするのは誤りである、という。

『中国漢字文物大系』も、

『説文』に「東は動なり。木に从ふ。官溥説く、『日、木中に在るに从ふ』と。凡そ東の屬、皆な東に从ふ」と。早期の実際の文字の形体からみれば、（東の文字の○あるいは口の形にあたる部分の）中間にある部分が一本の横画であったり、二本であったり、また交叉した線であったりして、決して「日」の形ではない。これにより、許慎が官溥の説を引いて「東」の字の結構を解釈して、「日、木中に在り」としたのは、あきらかに実際の状況に符合していない。「東」は、まさに「橐」と同源であるべきで、甲骨文、金文は兩端を束ねて縛った袋のようである。これは「東方」が仮借の用法だということを示している。

という。

ここには数多くの実際の文字の拓本 A (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) があげられている。それらの実例から何点かを考察する。(14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) は「日」にあたる部分の内部が×の形になっている。またそもそも「日」にあたる部分は独立していない。左上から斜め右に円弧を描き左下に流れる一画と、それ

と左右対称に右上から斜め左に円弧を描き右下に流れる一画が交叉し、それに中央を上から下に走る一画、さらに×印にあたる二画で構成されている。画数は5画となる。も同様で「日」にあたる部分は独立していない。ここでは×印ではなく、横画である。画数は4画となる。「日」にあたる部分のみ考えると「日」に似ている。

は「日」にあたる部分の内部の横画が二本。これだと「日」ではなく「目」である。は下の3つに分かれている部分が上の「日」にあたる部分と離れている。画数は6画のように思われる。ここまですが殷の甲骨と金文である。は上の3つに分かれている部分が「日」にあたる部分と離れている。

は春秋晩期、は戦国時期のものである。は戦国時期の印の文字である。ここでは完全に「日」の部分が独立している。は後漢の篆書である。全体に角張っているが、「日」の部分が独立している。甲骨・金文から篆書へと字体が移行するうちに、しだいに「日」の部分が独立して書かれるようになったのである。比較の対象として、『説文解字』の文字      もあげておく。

 は下の部分の広がり方が大きい。  は全く同形だが、「日」にあたる部分がかかなり丸くなっている。 は白川静『字統』のものだが、上の3つに分かれている部分が狭くなっている。また下の3つに分かれている部分が上の「日」にあたる部分と離れていない。

日の上の横画は  は外に広がっており、  はほぼ直角に上方に曲がっている。

甲骨文や金文の段階では、『説文解字』に引く官溥の説、「日、木中に在り」は成り立たない場合があることがわかる。また書き順がしだいに変化していく過程で「日」にあたる部分が、上下と離れていき、楷書の「東」に近づいていくことがわかった。

一、『説文解字』の東

(1) 東

・許慎の説
後漢、許慎の『説文解字』巻六上、東部、東に次のようにみえる。

東は動なり。木に从ふ。官溥説く、「日、木中に在るに从ふ」と。凡そ東の屬、皆な東に从ふ。⁽²⁴⁾

許慎は、「東」は「動」であるとまず述べる。これは「音義説」だとされる。⁽²⁵⁾そして官溥⁽²⁶⁾という人物の説を引用して、

日、木中に在るに从ふ

という。

これは「音」ではなく「形」である。

(2) 溥

『説文解字』巻六上、木部、溥には、

樽・樽桑、神木、日の出づる所なり。木に从いて專聲⁽²⁷⁾。

とみえる。

これは官溥の説と対応しているように思われる。

(3) 叒

『説文解字』巻六下、叒部、叒の説明も同様である。

𣎵 日初めて東方の暘谷に出^いで、登る所の樽桑。叒木なり。象形、

凡そ叒の屬、皆な叒に从う（而灼^{じやく}の切²⁸）。

「叒」は「樽桑」ということになる。「樽桑」は「扶桑」に通じるだろう。ただし音は「そう」ではなく「じゃく」とされている。

白川静は『字通』「桑」で、

叒は〔説文〕六下に「樽桑（ふさう）叒木なり」とあり、字はま

た若（若）木に作る⁽²⁹⁾

という。

「叒（じゃく）・𣎵『説文解字』篆書」と「若（じゃく）・𣎵『説文解字』篆書」は、本来の字形や発音が近いのであろう。ここでは、「叒木」と「若木」が同じだとされる。つまり、「樽桑（＝扶桑）＝叒木＝若木」ということになる。

「若」にはさまざまな意味がある。白川静は「1. したがう、神意を求めしたがう。2. よい、神意がよしとする⁽³⁰⁾」と「神」と結びつける。『莊子』外篇、秋水篇には「北海若」とみえる。この「若」は固有名詞ではあっても「神」と関わるであろう。

白川は、

日が東方のこの木より昇るとされる神木であるが、桑とは関係がない⁽³¹⁾。

と、蚕が葉を食べる「桑」と「樽桑（扶桑）」は関係がない、という。

ただ、「叒（じゃく）」と「桑（そう）」の発音がなぜ異なり、「木」がつくことによって、なぜ「じゃく」が「そう」になるのかについては説明がない。

清の段玉裁は、「官溥説、从日在木中」の部分に注して、

木は、樽木なり。日、木中に在るを東と曰い、木上に在るを杲と

曰い、木下に在るを杳と曰う⁽³²⁾。

という。

これは『説文解字』巻七の「杲、明也。从日在木上」。「杳、冥也。从日在木下」の説明を受けての説である。これは後出の南宋、鄭樵（一一〇四—一一六二）『通志』六書略にもみえる。

いずれにしても「東」「杲」「杳」は、「日」が「木」のどこにある

「東」と扶桑が結びつけられる理由

かという区別とされており、『説文解字』の中で論理は完結している。また「杲」「杳」については官溥説という言い方がされておらず、官溥説をふまえた許慎の説なのだろう。

(4) 棘

『説文解字』巻六

𣎵(棘)

文字だけあって許慎の説明がない。⁽³³⁾ 東が二つである。これを部首とする文字は、𣎵(曹)であるが、なぜか、ここにはあげられていない。「東」が「日」と「木」であるならば「棘」は複数の「日(太陽)」になるのかもしれない。

三、扶桑説

扶桑という語は、扶搖、扶搖之枝、搏木、搏桑、若木、扶桑、扶木とさまざまに表現されている。ここではそれを確認する。

・扶搖

『莊子』逍遙遊篇には「扶搖」という語が二箇所みえる。

鵬の南冥に徙るや、水に撃つこと三千里、扶搖を搏ちて上ること

九萬里⁽³⁴⁾。

ここにつけられた西晉の郭象(二五二—三一二)の注は、

扶搖は風の名なり。⁽³⁵⁾

である。

つまり、扶搖は「風」であり、鵬という鳥が「風」に乗ってそらに舞い上がるという解釈である。

もう一か所は、

鳥有り、其の名を鵬と為す、背は泰山の若く、翼は天に垂るるの雲の若し、扶搖羊角を搏ちて上ること九萬里、雲氣を絶ち、青天を負い、然る後ち南を圖り、且に南冥に適かんとするなり。⁽³⁷⁾

である。

この「釋文」は、「司馬云う、風曲がりて上行すること羊角の若し⁽³⁸⁾」とあり、羊角も同様に風のことだとする。

ところが、『莊子』外篇、在宥篇には、

雲將東遊し、扶搖の枝を過りて適きて鴻蒙に遭う。⁽³⁹⁾

とみえる。

「雲將」は「雲」で、「鴻蒙」は「太陽」の擬人化であろう。逍遙遊篇では「鯤」という魚が「鵬」という鳥に変化する。この「鯤」や「鵬」も同様に「太陽」のことであろう。(魚から鳥になって)「海の中から九万里の高きの空に上がり、雲気を絶ち青天を背負う」ことは「太陽」であれば納得できる。

逍遙遊篇で「扶搖は風の名」と注をつけた郭象は、ここの「扶搖之枝」に対しては注をつけていない。扶搖が「風」だと「風の枝」となってしまう、意味をなさなくなってしまうのである。

唐、成玄英の疏は、「扶搖は、(木)神(木)、東海に生ずるなり」とあり、「扶搖」は東海の神木(木神)である。そう解釈すれば「扶搖」は「扶桑」であろう。ただし、『莊子』の時代にまだ「扶桑」という言い方は生まれていなかったように思われる。

在宥篇は外篇であり、莊周(前三六九?—前二八六?)の後学の作と考えられている。けれども『莊子』の注釈者、郭象(二五二—三一二)よりは、はるかに莊周本人の時代に近い。この在宥篇をむしろ注釈とみなして「扶搖」を考えれば、「扶搖」は「風」ではなく「神木」であり、のちの「扶桑」とみなしうるのではないだろうか。そう考えると逍遙遊篇、在宥篇のいずれの「扶搖」も「木」と「日(太陽)」に関連があると思われる。

・樽木

『山海經』東山經に、

東のかた樽木を望む⁽⁴¹⁾

とみえる。

郭璞の注には、

扶桑二音。

とある。

『淮南子』時則訓には、

東至日出之次、樽(扶)木之地、青土樹木之野(樽木樽桑)

(東のかた日出づるの次、樽木の地、青土樹木の野に至る)

とみえる。

「樽」には、「扶」の、また「樽木は樽桑なり」⁽⁴²⁾の注がつけられている。これによれば、「樽木||樽桑||扶桑」ということになる。

・樽桑

後漢、王逸(一二六頃)の『楚辭章句』卷十四、哀時命に、

左祛、樽桑に挂く⁽⁴³⁾。

とみえる。

「東」と扶桑が結びつけられる理由

哀時命は、前漢、司馬相如（前一七九―前一一七年）と同時代の厳忌の作だとされている。

注に「袂は袖なり⁽⁴⁴⁾」とあり、衣服の袖のことである。

・若木

「若木」は『山海経』大荒北經にみえる。

上に赤樹有り、青葉、赤華、名づけて若木と曰⁽⁴⁵⁾う

とみえる。

その郭璞の注は、

崑崙の西に生じ、西極に附す。其の華、光ること赤、下りて地を照らす⁽⁴⁶⁾。

とされている。

この花は赤く光り、地上を照らしている。それは地上を照らす「日（太陽）」のイメージであり、また扶桑の花のイメージでもある。なお郭璞の注の「其の華、光ること赤、下りて地を照らす」の赤は本文に「赤華」とみえる。しかし、「下りて」の部分は本文にない。これは郭璞が『山海経』のこの本文に関する図を見て、そのように述べたということのように思われる⁽⁴⁷⁾。

・扶桑

『山海経』海外東經に、

湯谷上に扶桑有り⁽⁴⁸⁾。

とみえる。

その注は、

扶桑の木なり⁽⁴⁹⁾。

である。

このあと、

十日の浴する所、黒齒の北に在り、水中に居る。大木有り、九日、下枝に居り、一日上枝に居る⁽⁵⁰⁾。

とみえる。

「十日」は「浴」する。つまり、ゆあみ、みそぎである。

「浴」について、白川静は、

浴は廟に祈るためにみそぎする意の字である。「説文」十一上に「身を洒（あら）ふなり」とあり、浴・欲・容は一系の字。「国語・齊語」に、管仲が捕らえられて、齊につれ帰されたとき「三浴・欲・

容は一系列の字。「国語、齊語」に、管仲が捕らえられて、齊につれ帰されたとき「三鬢（さんきん）三浴」したことがしるされているが、これは虜囚のけがれを祓い、一たび死し、また蘇る儀礼としてなされるもので、招魂統魄の意味がある。髪を洗うことを沐といい、沐浴はみそぎの法であった。⁽⁵¹⁾

と説明する。

この中で、「三鬢三浴」について「けがれを祓い、一たび死し、また蘇る儀礼」という部分が興味ぶかい。これを「日（太陽）」に適用すれば、没した（死んだ）太陽が、みそぎしてけがれをほらい、木の枝に蘇り、朝日として再生復活するということになる。⁽⁵²⁾ここにみえる十日は、十日神話として展開する。

・扶木

大荒東経には、

大荒之中に山有り、名づけて孽揺げうと曰う、顛甌いんおう上に扶木有り、柱三百里、其の葉、芥の如し。⁽⁵³⁾

とみえる。

ここに「扶木」という文字がみえる。また、そこに「柱」があると記されている。その注には、

柱は猶お高きを起こすがごときなり、葉、芥菜かいたの似し。⁽⁵⁴⁾

とある。

さらに本文は、

谷有り、温源谷と曰う。⁽⁵⁵⁾

とみえる。「谷」は、本来、さきにみた「浴」の意味であったように思われる。しかし「温源谷」や「湯谷」のように、「谷」としても展開していくようである。

その注には、

扶桑、上に在り。⁽⁵⁶⁾

とある。「扶桑」と「扶木」は同じだと思われるが、その説明はない。

続けて、

一日、方いちじつに至り、一日、方まさに出づ。⁽⁵⁷⁾

とみえ、

その注には、

「東」と扶桑が結びつけられる理由

言うところは交こもも會し、相い代わるなり。⁽⁵⁸⁾

とある。ここには「日(太陽)」の数は明言されていないが、複数の「日(太陽)」がやってきては登っていく様子が記されている。さらに、

皆な鳥を載のす。⁽⁵⁹⁾

と記される。

その注は、

中に三足鳥有り。⁽⁶⁰⁾

とされる。

これは太陽の中に鳥がおり、それが三足鳥であることをいう。

前漢、淮南王劉安(前一七九―前一二二)撰『淮南子』天文訓は、

日、暘谷に出で、咸池に浴し、扶桑に拂ひる、是れを晨明と謂う。⁽⁶¹⁾

とみえる。

後漢の高誘(建安十年)の『淮南鴻烈解』は、

拂よは猶お過よるがごとし、一日至る。⁽⁶²⁾

である。

沈んだ「日(太陽)」は暘谷に出でて咸池で浴し、扶桑のところにやってくる。それを晨明という。晨明は夜明けだが、ここではまだ「日(太陽)」は扶桑に到着したばかりのようにみえる。

続けて本文は、

扶桑に登り、爰こゝに始めて將に行かんとす、是れを朏ひめいと謂う。⁽⁶³⁾

「朏」は三日月の意味だが、それに対しての注は、

窟くつ。⁽⁶⁴⁾

である。

そして「朏」に対しての注は、

朏ひめいは將に明ならんとするなり。⁽⁶⁵⁾

である。

日(太陽)が扶桑に登り、空に上ろうとし、天が明るくなろうとしていることをいう。

道應訓では、

扶桑受け謝し、日、宇宙を照らす⁽⁶⁷⁾。

とみえる。

扶桑が「日（太陽）」を受け取って、また、別れを告げ、（天にのぼった）日は宇宙を照らすということであろう。

高誘は、

扶桑は日出づる所の木、受謝とは、扶桑、日を受け、且に澤より之れを出だすなり。⁽⁶⁸⁾

と、扶桑が「日（太陽）」を出だす木で、受けると謝るとは、扶桑の木が、「日（太陽）」を受けとり、且に澤から出だすことをいう、とす

る。いづれも、扶桑から生み出される「日（太陽）」のことを述べている。

『隋書』経籍志三には、「淮南子二十一卷漢淮南王劉安撰許慎注、淮南子二十一卷高誘注」と『淮南子』には許慎の注があったとされる。許慎の注の方が高誘の注よりも古い。高誘が『淮南子』の注解にあたって、許慎の注を参考に行っている可能性はあるだろう。また、『説文解字』自体も参考に行っていたかもしれない。

以上、扶揺、扶揺之枝、榑木、榑桑、若木、扶桑、扶木とさまざまな文字がつかわれているが、基本的には同じものをさしているようにみえる。「榑」と「扶」は同じ、桑^サは若^{ニク}に通じる。発音にもとづけば、もうすこし整理できるだろう。また文字には深い意味はないの

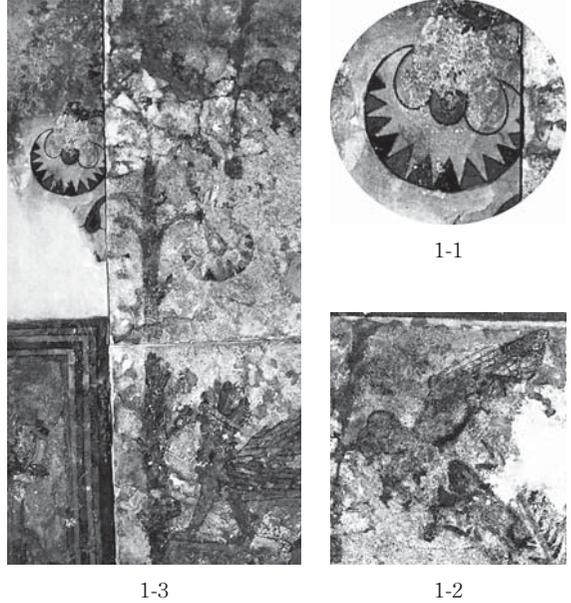
ではと思わせる。

四、図像の扶桑

現在、扶桑と考えられている図には以下のものがある。ただし、必ずしも図に扶桑と記されていたわけではなく、かりに扶桑の意味であっても、最初から「扶桑」とよばれていたわけでもない。そのような条件のもとでの図像ということになる。

1. 「神から王権を授かるマリ王」に描かれる樹木（部分）

「王が、獅子の上に右足をのせた戦いの女神イシュタルから王権を授かる情景を描き、まわりには左右相称の構図をとって有翼の獣や樹木をあらわしてある⁽⁶⁹⁾」とある。樹木は真ん中の人物たちを挟んで左右対称に描かれている。棗椰子ともう一種ある。もう一種の植物は特定されていない。ギザギザの花びらの花が下向きにいくつか描かれている⁽⁷⁰⁾。樹木の上部には嘴が下向きに湾曲した大きな鳥が羽を広げて横向きに描かれている⁽⁷¹⁾。中段には二頭の有翼獣が描かれ、下段にも一頭、獣が描かれている。下段の獣には翼はない。花は太陽をあらわしているようにみえる。⁽⁷²⁾ 楚漆画の扶桑にも太陽をあらわす花が描かれ、鳥や人面獣が樹木の上部に描かれ、よく似ている。



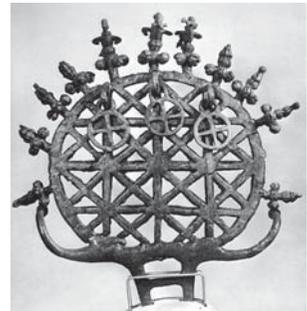
バビロン第1王朝 前18世紀壁画
250 × 175cm マリ出土
パリ ルーヴル美術館

2. 太陽円盤

「トルコ アラジャホユク出土の太陽円盤である。円盤の上部にある突起には、下から上に向けて、それぞれ5個の瘤のある花があり、それらの上に、飛ぶ鳥の小像が付されているのが特徴的である」⁽⁹⁾とされる(21)。花とその上に乗る鳥(22)は、三星堆の青銅の神樹(扶桑樹)にみえる太陽円盤と花と鳥(31)によく似ている。



2-1



2-2

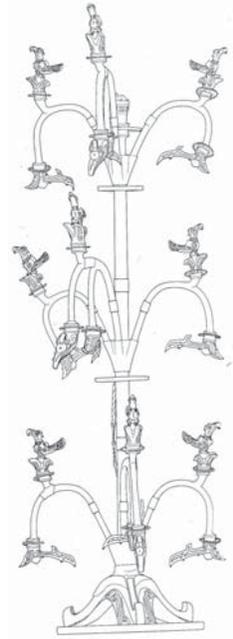
3. 三星堆の銅神樹

一九八六年に四川省広漢三星堆遺址二号祭祀坑より出土したものである。高さは三九六cmで、ほぼ四mある。全体は三層に分かれ、それぞれ三本の枝がでており、全部で九本に枝分かれしている。ここでは、線描きされたものを掲げた(23)。神樹はたしかに扶桑にみえる。しかし、これと同様のものを後漢の許慎が見たとは思えない。ただ、のちにあげる十三支陶灯とは形が類似している。神樹から十三支陶灯へとつながっていくのかもしれない。神樹の用途については不明である。ただ、太陽円盤と呼ばれる円盤の上に花が咲き、その上に鳥が載る(31)。鳥の形状はさまざまである。これとは別に大きな太陽円盤と呼ばれるものがある。車のハンドルのような形である。

初期青銅時代 前2600年 前2000年
ブロンズ 高さ34cm
アラジャホユク出土
アンカラ アナトリア諸文明博物館

戦国時代の楚の墓である曾侯乙墓から出土した漆匣がある。その上に描かれた図の一つが衣箱蓋面弋図である(4-1)。黒い漆を背景にして赤の漆で扶桑とおぼしき樹木が二本ずつ計四本描かれている。向かって左の樹木には上部に鳥が二羽載り、もう一羽は弋で射られて落下している。樹木には「日(太陽)」にみえる花が十咲いている。花には下に向くものもある(4-2)。この花は、「日」をあらわしている(4-2)とされる。向かって右の樹木には上部に人面獣が二頭載る。顔のまわりはライオンの鬣のようになっていて、「日(太陽)」をあらわす花ともよく似ている。人面九首の開明獣(4-3)につながるものかもしれない。

4. 衣箱蓋面弋図



3-1

3-2

四川省文物考古研究所編『三星堆祭祀坑』
 文物出版社、1999、図一二〇
 I号大型銅神樹(K2②:94)の左から二の図

5. 十三支陶灯

一九七二年に洛陽の後漢晚期墓から、高さ八五cmの十三支陶灯が発掘された。赤く短いズボンをはいた羽人と龍が造形されている。曲がった枝の先には灯蓋があり、そこには透かしぼりの陶器の板が置かれている(4-1)。灯蓋に火をつければ、たくさん小さな太陽のように見えるが、透かしぼりから明かりが漏れ出て壁などに投影される仕組みなのだろう。



4-1



4-2

「東」と扶桑が結びつけられる理由



5
洛陽七里河東漢墓十三支陶灯
洛陽博物館

6. 馬王堆の帛画

「木」の間に「日（太陽）」があるという形にもっとも近いのは前漢の馬王堆の帛画であろう。「扶桑」は蔓植物のように描かれ樹木にはみえないが、三号漢墓の帛画(6-3)⁽⁷⁵⁾、一号漢墓(6-1)⁽⁷⁶⁾ともに描かれている。(6-2)⁽⁷⁷⁾はカラーのものである。三号漢墓の方が少し古い。上には大きな「日（太陽）」が赤色で描かれ、中にシルエットのよう
に黒く塗りつぶされた鳥がいる。黒いため鳥と誤認されている。しかし、この鳥の尾羽の先は丸くなっており、そのような鳥はいない。画面の中間に描かれる二羽の人面鳥(6-4)⁽⁷⁸⁾(6-5)⁽⁷⁹⁾も尾の先が丸く、人面部分をのぞけばシルエットはそっくりである。この図の淵源はエジプトの太陽の中のハヤブサかもしれない(6-6)⁽⁷⁸⁾。なお扶桑とされる植物の枝と葉の間には小さな太陽が八つ描かれている⁽⁷⁹⁾。



6-4



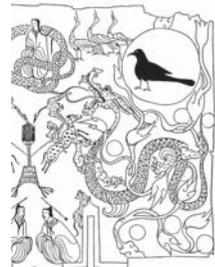
6-5



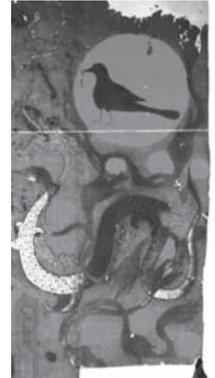
6-6



6-3



6-1



6-2

7. 陝西大保当漢墓⁽⁸⁰⁾の壁画に「日(太陽)」は多く描かれている。天井の中央に描かれるものは馬王堆帛画最上部の太陽に相当するだろう。黒い鳥が中にいる。馬王堆のものはうづくまっているが、大保当のものは飛んでいる。『淮南子』に「日中に駿鳥有⁽⁸¹⁾」とある。『淮南子』(建元二年(前一三九)に武帝に献呈)では「鳥」と認識されている。しかし、先にみたように馬王堆帛画(前一六八)の黒い鳥は鳥ではない。これは馬王堆の帛画の成立以前に「日の中に鳥がうづくま⁽⁸²⁾る」という文章はなかったか、帛画の作者はそれを知らなかったということになる。ところが、帛画から『淮南子』までの三〇年ほどの間に「黒い鳥」が「鳥」と誤認されてしまい、それが踏襲されていったということであろう。「日中有駿鳥」に高誘は「駿は猶お蹲のごときなり。三足鳥を謂⁽⁸³⁾う」という注釈をつける。蹲も、うづくまるという意味である。そこに三足鳥(7-2)⁽⁸⁴⁾という言い方を付け加えている。後漢末の高誘のみた鳥は三本足の鳥であったのだろう。飛んでいる場合は足が見えず(7-3)⁽⁸⁵⁾、鳥は雲気文とともに描かれるものもある。この雲気文は本来、雲ではない。ヘラジカ系の鹿の角から変化したものであろう。馬王堆の刺繍にみえるグミ文もその系列の文様⁽⁸⁷⁾で、それは蔓草状の扶桑ともつながっている⁽⁸⁸⁾。

以上、扶桑に関わる図像を考察した。三星堆のものは青銅で神樹とされている。太陽輪と花があわさり、そこに鳥が描かれる。この形象は、はるか後の十三支陶灯にひきつがれているように思われる。戦国楚墓の漆の匣に描かれる扶桑も樹木である。太陽は複数個描かれるが、いずれも枝の先に咲く花のようにみえる。やはり鳥がおり、また獣が

いる。『山海経』の文章ともつながるようにみえる。馬王堆帛画には天空にかかる大きな「日(太陽)」とその中に黒い鳥がえがかれる。これは本来、鳥ではないが、のちの類似の図像では鳥となり、足が三本になる。複数の小さな太陽は赤い実のように描かれる。橘や蜜柑・金柑などの柑橘系の丸い実にも似る。これは『日本書紀』にみえる非時香菓⁽⁸⁹⁾の形象に引き継がれていくように思われる。



7-3



7-1



7-2

「東」と扶桑が結びつけられる理由

五、『説文解字』以後の東

南宋、鄭樵撰『通志』六書略第二、互體別聲轉注音義に、

杲（古老切、明也、从日在木上）東（从日在木中）杳（冥也、从日在木下、木若木也、日之所升降⁹¹）とみえる。

『説文解字』では「杲」「杳」は木部で、「東」は東部であり、部首が異なる。『通志』では、『説文解字』の部首の違いを無視したうえで、杲（从日在木上）東（从日在木中）杳（从日在木下）と連続させている。このことにより杲・東・杳が「日」の位置による差であることを明確にさせているのである。

元、黄公紹原編、熊忠舉要『古今韻會舉要』（一二九七）卷一、東に、

東は都籠の切。微清音。『説文』に「動なり。日、木中に在るに从う」と。『漢志』に「東方陽氣動く」と。夾溲鄭氏曰く、「木は若木なり。日の升降する所、上に在るを杲と曰い、中に在るを東と曰い、下に在るを杳と曰う」と。『廣韻』に「春方也。又た姓。舜の後、東不訾有り」と。⁹²

ここでは先にみた『通志』の内容を整理し、わかりやすくまとめたうえで、東の文字の説明の中心にすえている。

明、倪謙（一四一五—一七九）撰『倪文僊集』卷二十三、書に錢昱⁹³起東字説がある。

日は陽の精なり。天に附して行り、運動して息まず、循環して端無し、然れども地、天の中に處り、其の隔たる所と爲る、故に地を出づれば則ち光昱らかにして晝と爲り、地に入れば則ち光斂まりて夜と爲る。其の出づるに至りてや、常に東に在り。東は動なり。陽氣の動く所なり。是を以て字の義を制するに、日、木中に在り。木は若木なり。日の升降する所、下に在るを杳と爲し、中に在るを東と爲し、上に在るを杲と爲す。詩に曰く、「杲杲として出づる日あり」と、是れなり。夫れ日は必ず東より起こりて、西に没し、南に徙り北に易わるの、忒無し。是れ其の出づる所、常所有るなり。必ず榑桑に登りて虞淵に至り、度を越し次を失するの變無し。是れ其の行く所、常序有るなり。其の麗びて東するや、容光必ず照らす。是れ其の常公有るなり。其の既に往くや、必ず東に復る。是れ其の常信有るなり。…後略…⁹⁴

この話では「東」の話を「日（太陽）」から始め、その循環にもとづく規則性を道徳的な信頼と重ね合わせて、ほめたたえている。「日」在木中、木若木也。日所升降、在下爲杳、在中爲東、在上爲杲」の部分は、さきに『古今韻會舉要』でみたものと順序は異なるもの内容は同じである。

甲骨文が発見されるまでは、「杲」「東」「杳」の三つをまとめて説

字統	1984
白川静、 平凡社	白川静、 平凡社
<p>「借借」東はもと「東」の象形字で、東の初文。のち仮借して方位の東の意に用い、本義の東の意に用いることはない。本義を失った字であるから、仮借とする。「説文」六上に「動くなり」と訓するのは、春に蠢動する意とするもので、音義説である。曹はもと二東に従う形で、裁判を求める当事者が、東矢鉤金を東に入れて提供し、裁判が行われた。東が東の形であることは、そのことから知られる。「説文」に字形を「日の木中に在るに従ふ」とし、樽桑神木の意とするのは誤りである。 ↓ 桑・曹</p>	<p>「借借」東はもと「東」の象形字で、東の初文。のち仮借して方位の東の意に用い、本義の東の意に用いることはない。本義を失った字であるから、仮借とする。「説文」六上に「動くなり」と訓するのは、春に蠢動する意とするもので、音義説である。曹はもと二東に従う形で、裁判を求める当事者が、東矢鉤金を東に入れて提供し、裁判が行われた。東が東の形であることは、そのことから知られる。「説文」に字形を「日の木中に在るに従ふ」とし、樽桑神木の意とするのは誤りである。 ↓ 桑・曹</p>
○	○
『説文解字』の説は誤りとする。	東の初文は象形であるが、のち仮借義にのみ用いられるものであるから、仮借。

『説文解字』では六書を説くものの個別の文字に関して、それを割り当てることはない。『通志』六書略では「転注」とされ、『六書故』

では「会意」、日本の『大字典』も同様、甲骨文の字形を考慮した『新字源』では「象形」、方位の東方に用いることを重視した『字統』『字通』では「借借」である。

おわりに

『説文解字』の作者、許慎が「東」という文字の成り立ちを考えたとき、『山海経』や『淮南子』にみえる「扶桑」説話が頭にあったと思われる。「扶桑」は「扶搖」「搏木」「若木」「扶木」「搏桑」などさまざまな名称で呼ばれるが同じものをさす。「扶桑」と考えられている図像は『山海経』の説話などよりも、はるか以前からある。しかもそれは遠くオリエン트에淵源をもつ可能性がある。三星堆の神樹や戦国時代の楚の漆画、前漢の馬王堆漢墓の帛画、十三支陶灯などは、ことごとく扶桑と関連があるだろう。それらの話を一直線につなぐことは不可能である。けれども、そのことはかえって、これらの話が深く浸透し、また相当な広がりをもっていたことを示している。

そのモチーフは「日（太陽）」の復活再生に対するあつい信仰であろう。さきにみた錢昱の起東字説は、「日（太陽）」のもつ「循環」「常序」をほめたたえ、「其の既に往くや、必ず東に復る」と述べている。けれども、このことはすではるか以前に気づかれていて、さまざまに表現されていたと思われる。『莊子』の逍遙遊篇の冒頭の扶搖の話は、鯤と鵬に借りて「日（太陽）」の復活再生と人の死生をからめて哲学的に思索したのだろう。馬王堆の帛画の扶桑や前漢・後漢の墓室に描かれた扶桑の図像は、描かれたものが実現するという呪術的な思考

によって、沈んだ「日（太陽）」が復活再生するように、死者である被葬者の魂があつた世で復活再生することを願ったのであろう。

許慎は、たんに立木の間をのぼる「日（太陽）」を見て、「東」という文字を解釈したのではないだろう。もしそうなら、それは「西」にもあてはまる。『春秋繁露』に「東方は木なり」とみえ、五行思想の「木」は必ず「東」と結びつく。『説文解字』の部首の数は五四〇で、それは『易』の陽爻「九」と、陰爻「六」の乗数である「五十四」の十倍である。これは陰陽思想である。そして「東」は木偏ではなく、「東」という部首とされているのである。許慎は当時の文字について陰陽五行の概念をもとに美しく整理しようとしたのであろう。それは彼が文字の体系は本来、そのようにできあがっているべきだと考えたからにほかならない。

許慎の時代、扶桑の図像や造形はあちこちにあったと思われる。扶桑の間に「日（太陽）」を描いた図像を目にした許慎は、その図像が陰陽五行の概念にもとづく文字の体系と齟齬するものではないことを確信したのではないだろうか。

「木」と「日」の二つの文字に着目すれば、それは六書の中の「会意」となる。しかし、目にした図像をそのまま文字にあらわしたと考えれば、むしろ「象形」となる。許慎はそのようなイメージとしての「象形」として「東」をとらえたのではないだろうか。

※拙稿は二〇一五年度科学研究費基盤研究（C）「中国古代における龍と舟と扶桑にみる復活再生観念の研究」の研究成果の一部である。

注

- (1) 阿辻哲次『漢字学…『説文解字』の世界』阿辻哲次著 東海大学出版会、一九八五、七頁には、「東」字について「の周到な解説がある。拙稿は阿辻氏の説にもとづきながら、図像の立場から「文字」の成り立ちの一端が説明できないかと考えている。
- (2) 象形者畫成其物、隨體詰詘、日月是也。『説文解字』卷十五上。
- (3) 白川静『字通』の「月」にあげられている甲骨文の例。
- (4) 白川静『字通』は「仮借」とみている。
- (5) 許君言、東、動也。官溥説。從日在木中。此就殷周以來習用東方之義以附會字形也。東、卜辭作、殷契卷二第五葉。亦作、殷契卷六第六六葉。木中皆不得謂為從日。友人徐中舒先生曰。東、古棗字。埤蒼曰。無底曰棗。有底曰囊。史記索隱引。倉頡篇曰。囊、棗之無底者也。實物囊中。括其兩端。象形象之。鼎文重字作。象人負囊形。棗以貯物。物後世謂之東西。東西者囊之轉音也。山按其說甚是。毛公鼎有字。散氏盤有字。諸家竝釋為囊。囊許君謂從棗者。實則所從之即囊字。易文所謂括囊者也。囊中無物。棗其兩而故亦謂之東。實以物。則形拓大。者。囊之拓大者也。故名曰棗。東與東為雙聲。故古文借之為東方。春秋繁露東方者木。廣雅釋天。東君。日也。此又附會以五行矣。『説文闕義』『古文字詁林』六、古文字詁林編纂委員會、上海教育出版社、二〇〇三年、四頁、「東」。
- (6) 上下二字の発声子音が同じであるもの。前掲『字通』双声。
- (7) 象棗中實物以繩約括兩端之形、爲棗之初文。甲骨文金文俱借爲東方之東、後世更作棗以爲囊棗之專字。『説文』：「東、動也。从木。官溥説、从日在木中。」乃據後起之字形為説、不確。徐仲舒主編『甲骨文字典』一九八八、卷六、六六二頁。
- (8) 劉志基主編、大象出版社二〇一三、第六卷、二九四頁。
- (9) 『説文』：「東、動也。从木。官溥説…从日在木中。凡東之屬皆从東。」從早期實物文字の形體來看、中間所从の部分有一横、也有二横、還有交叉の線條、絶非「日」形、因此、許慎引官溥説解釋「東」字構形爲日在木中顯然是不符合實情的。「東」當與「棗」同源、甲骨文、金文象兩端束縛之口袋。表示「東方」應當是其假借的用法。
- (10) 『甲骨文合集』6906、殷。前掲『中国漢字文物大系』二九〇頁、東。
- (11) 『甲骨文合集』8734、殷。同右。
- (12) 『甲骨文合集』33422、殷。同右。
- (13) 辟東作父乙尊、中国社会科学院考古研究所編『殷周金文集成积文』、香港中文大學中國文化研究所出版、二〇〇一、一三三頁、3869、西周早期。

- 同右にも引かれる。
- (14) 格伯篋(殷)、『殷周金文集成积文』第三卷、三七六頁、4283、西周中期。同右にも引かれる。
- (15) 晋侯蘇編鐘、新収殷周青銅器銘文暨器影彙編870、西周晚期。前掲『中國漢字文物大系』二九〇頁、東。
- (16) 郟叔之仲子平鐘、前掲『殷周金文集成积文』第一卷、一七三頁、173、春秋晚期。同右にも引かれる。
- (17) 東周左師壺、前掲『殷周金文集成积文』第五卷、四二二頁、9640、戰国。同右にも引かれる。
- (18) 『古璽彙編』3694、殷。戰国、同右二九一頁。
- (19) 司徒袁安碑、東漢。同右二九三頁。
- (20) 後漢、許慎撰、宋、徐鉉等奉勅校定、『說文解字真本』、『四部備要』所収、台湾中華書局一九六五、「東」。
- (21) 南唐、徐鍇撰『說文解字繫伝』前掲『四部備要』所収、「東」。
- (22) 清、段玉裁撰、『說文解字注』前掲『四部備要』所収、「東」。
- (23) 白川静『字統』、平凡社、一九八四、六四三頁、説文「東」。
- (24) 動也。从木。官溥説、从日在木中。凡東之屬皆从東。
- (25) 白川静は「字通」東で「説文」六上に「動くなり」と訓するのは、春に蠢動(しゅんどう)する意とするもので、音義説である」とする。白川は、五行思想の観点から、東=春=蠢動、と解したようだ。
- (26) 不明。人名と解した。「この人についての詳しい伝記などはまったくわからない」(阿辻哲次『漢字学』『説文解字』の世界)東海大学出版会、一九八五、一〇頁)とされている。なお官溥は『説文解字』巻四にも、「華箕屬。所以推棄之器也。象形。凡華之屬。皆从華。官溥説(華は箕の屬。棄を推す所以の器なり。象形。凡そ華の屬、皆な華に从う。官溥の説)」と「官溥の説」とみえる。
- (27) 搏・搏桑、神木、日所出也。从木專聲。
- (28) 魯日初出東方暘谷、所登、搏桑、爻木也。象形、凡爻之屬、皆从爻、(而灼切)。
- (29) 『字通』九八八頁。
- (30) 『字通』七二二頁、若。
- (31) 前掲『字通』桑。
- (32) 木、搏木也。日在木中曰東、在木上曰杲、在木下曰杳。
- (33) 宋徐鉉の増釋は、二東、譬从此闕。
- (34) 鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里。
- (35) 扶搖風名也。
- (36) 「搏扶搖羊角而上者九萬里」は森三樹三郎訳注『莊子』内篇(中央公論社、中公文庫、一九七四)は「扶搖を搏ちて羊角にして上ること九萬里」と訓読している。ここは「羊角」を扶桑の枝の形として理解したため、「扶搖羊角を搏ちて上る」と訓読した。拙稿『莊子』逍遙遊篇冒頭の話と馬王堆帛画「魚・鳥・太陽・扶桑をめぐって」郵政考古紀要(五〇)、二〇一〇を参照。
- (37) 有鳥焉、其名為鵬、背若泰山、翼若垂天之雲、搏扶搖羊角而上者九萬里、絶雲氣、負青天、然後圖南、且適南冥也。
- (38) 司馬云、風曲上行若羊角。
- (39) 雲將東遊過扶搖之枝而適遭鴻蒙。
- (40) 扶搖、(木)神(木)、生東海也。
- (41) 東望搏木。
- (42) 搏木、搏桑。
- (43) 左祛挂於搏桑。
- (44) 祛、袖也。
- (45) 上有赤樹、青葉、赤華、名曰若木。
- (46) 生崑崙西、附西極。其華光赤、下照地。
- (47) 拙稿「中國の死生觀に外國の圖像が影響を与えた可能性について」馬王堆帛畫を例として、『東方宗教』一一〇号、日本道教学会、二〇〇八)二、先有圖畫後有文字。
- (48) 湯谷上有扶桑。
- (49) 扶桑木也。
- (50) 十日所浴、在黑齒北、居水中、有大木、九日居下枝、一日居上枝。
- (51) 『字通』浴、平凡社、一九九六。
- (52) 拙稿「救日祭祀と十日神話」『アジア文化交流研究』第4号、関西大学アジア文化交流研究センター、二〇〇九)一、二〇頁を参照。
- (53) 大荒之中有山、名曰孽搖、顛瓶上有扶木、柱三百里、其葉如芥。
- (54) 柱猶起高也、葉似芥菜。
- (55) 有谷曰、温源谷。
- (56) 扶桑在上。
- (57) 一日方至、一日方出。
- (58) 言交會相代也。
- (59) 皆載于鳥。
- (60) 中有三足鳥。
- (61) 日出于暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、是謂晨明。
- (62) 『淮南鴻烈解』序に「建安十年辟司空掾、除東郡濮陽令」とみえる。建

安十年は二〇四年にあたる。

- (63) 『淮南鴻烈解』天文訓、拂猶過、一日至。
(64) 登于扶桑、爰始將行、是謂朏明。
(65) 窟。
(66) 朏明將明也。
(67) 扶桑受謝、日照宇宙。
(68) 扶桑、日所出之木、受謝、扶桑受日旦、澤出之也。
(69) 『大系世界の美術2 古代西アジア美術』学習研究社、一九七二、七〇頁。
(70) 新規矩男責任編集、学習研究社、一九七五『大系世界の美術2 古代西アジア美術』二七九頁。
(71) 湖北省博物館編著『曾侯乙墓文物芸術』湖北美術出版社、一九九二、二七一—衣箱蓋面七図。
(72) 前掲『曾侯乙墓文物芸術』一八〇頁、陳惠明「漆画図象考」。
(73) 開明猷、山海經卷十一、海内西經。崑崙南淵深三百仞、開明獸身大類虎、而九首皆人面、東嚮立崑崙上靈淵。
(74) 王繡、霍宏偉著『洛陽兩漢彩画』文物出版社、二〇一五、五〇—五一頁の解説を参照。五二頁に図一七ととして、この図が載せられる。
(75) 曾布川寛『中国美術の図像と様式』研究篇、中央公論美術出版社、二〇〇六、作圖溥江、昇僊図、前一六八より数年後、長二〇五cm。
(76) 同右彩絵帛画、前漢初期、前一六八より数年後、長二〇五cm。
(77) 傅萃有、陳松長編著『馬王堆漢墓文物』湖南出版社、一九九二。
(78) 拙稿「中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について—馬王堆帛画を例として—」東方宗教第一一〇号、日本道教学会、一一—三六頁、二〇〇七を参照。この図は『大系世界の美術3 エジプト美術』学習研究社、一九七二、九九頁にみえる「魂を迎える2女神」の一部。二九〇頁の図版説明では「ここでいう魂とは、古代エジプト語でパーと呼ばれているもので、人間の永遠の生命を担うものと考えられており、普通は人頭で鳥の姿で描かれる。冥界の大神オシリスのパーはメンデス（下エジプト）の牡羊とみなされていたため、ここではパーの姿は、復活してオシリスとなった故王をあらわすため牡羊頭の鳥となっている。のぼる太陽の中に描かれたパーは魂の復活をあらわし」とある。太陽の中に入り魂が復活するという考え方である。
- (79) 前掲拙稿「中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について—馬王堆帛画を例として—」三号漢墓には小さな太陽はない。
(80) 韓偉主編・王焯林副主編・陝西省考古研究所編『陝西神木大保当漢彩絵画像石』重慶出版社、二〇〇〇。六頁に「…大部分墓的年代經初步研究可

以定在公元一〇〇年前後、也即東漢中期」と、墓の作られた時期は後漢（二五—二二〇年）の中期である百年前後とされている。

- (81) 日中有駿鳥。卷七、精神訓。
(82) 「駿、猶蹲也。謂三足鳥」。
(83) 同一四九頁。足は三本描かれている。
(84) 同九八頁。足は三本描かれている。
(85) 二〇七八頁。
(86) 拙稿「雲氣文と鹿の角」形の文化研究6号、形の文化会、二〇一一、四五—五八頁を参照。
(87) 前掲「中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について」一四頁で「帛畫の扶桑は、同じく馬王堆出土の絹の茱萸文様とも似ている。さらに「山地アルタイのスフィンクス」とされるパジリクの人面獸身の角や尾の文様にも似る」と述べた。
(88) 宇野瑞木著『孝の風景 説話表象文化論序説』（勉誠出版、二〇一六）「第一部 図像の力、はじめに—墓と図像、第一章 後漢墓における孝の表象—山東省嘉祥泉武梁祠画像石を中心に、第三節 扶揺と扶桑—風と木の互換可能性」に、画像石の圖像に関して詳しく考察されている。
(89) 『日本書紀』卷第六、垂仁天皇紀、「皇命田道間守、遣當世國、令求非時香菓」。
(90) 訓詁は省略した。()内は二行の割注。
(91) 夾溱鄭氏は鄭樵のこと。『通志』の作者。夾溱は鄭樵の号。
(92) 東、都籠切。徵清音。說文動也。从日在木中。漢志、東方陽氣動。夾溱鄭氏曰、木若木也。日所升降、在上曰杲。在中曰東。在下曰杳。廣韻、春方也。又姓。舜後有東不訾。
(93) 『宋史』卷四百八十、列傳第二百三十九、世家三、吳越錢氏にみえる。咸平二年（九九九）に没す。
(94) 詩、衛風、伯兮。
(95) 日は廣淵の汜に入り、蒙谷の浦に曙く（日入于廣淵之汜、曙於蒙谷之浦）。『淮南子』天文訓。
(96) 日者陽之精也。附天而行、運動不息、循環無端、然地處於天中爲其所隔、故出地則光晝而爲晝、入地則光斂而爲夜、至其出也、常在於東、東動也、陽氣所動也、是以制字之義、日在木中、木若木也。日所升降、在下爲杳、在中爲東、在上爲杲。詩曰、杲杲出日、是也。夫日必起於東、而沒於西、無南徙北易之忒、是其所出、有常所也。必登博桑而至廣淵、無越度失次之變。是其所行、有常序也。其麗東也、容光必照、是其有常公也。其既往也、必復於東。是其有常信也。…後略…

「東」と扶桑が結びつけられる理由

(97) 六書についての詳細な考察は、前掲『説文解字』一〇五頁、「文字解積の基盤Ⅱ六書Ⅱ」を参照。

(98) 呪術としての図像については拙稿「戦国楚帛画の舟にみる復活再生観念の考察」『人文学論集』第32集、二〇一四を参照。

(大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科・教授)